三峯神社随身門の建築と大工について

ー 三峯神社社殿の研究２ ー

Keywords
三峯神社　随身門　木割
匠明　　林兵庫　文化財

AK14021　大木　研汰

1.　はじめに

1.1　研究目的・背景

三峯神社敷地内には本殿や拝殿、23社の摂末社、神楽殿、随身門など多数の建物が存在する。その中で文化財指定をされているものは、県指定有形文化財である本殿のみである。その中で本研究では随身門に注目し、建物だけではなく大工棟梁についても調査を行い、実際どのように設計されたのかを木割書を用いて考察し、歴史建造物としての価値を評価し文化財指定を目的とする。

1.2　研究方法

（1）三峯神社で実測調査を行い図面作成。
（2）随身門の様式・歴史や棟梁について考察
（3）以上より随身門の文化的価値を考察する。

1.3　実測調査

名称：三峯神社随身門、拝殿、国常立神社、東照宮上舎、八棟木灯台、手水舎
実測日：2017年8月8・9・10日
所在地：埼玉県秩父市三峰298-1

2.　三峯神社について

2.1　概略

約1900年前に創建された神社であり、主祭神は伊弉諾尊と伊弉冊尊である。三峯山頂の海抜1100mの高所に建っており、三峯神社と寶登山神社と秩父神社をあわせて秩父三社と呼ばれている。また、三峯講や狼信仰という独特の信仰形態をもっている。旧社格は県社であった。

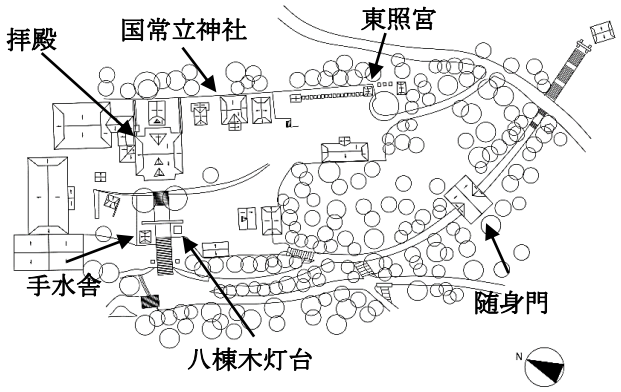

図１　三峯神社配置図

2.2　三峯神社の歴史

(1)　起源

景行天皇が国の平和を目的に皇子日本武尊を東国平定へと遣わした際、碓氷峠（うすいとうげ）へと向かう途中に現在三峯神社が建っている山へと登り、国の平和を祈ってお宮を造営し、伊弉諾尊（イザナギノミコト）と伊弉冊尊（イザナミノミコト）の二神を祀ったことが三峯神社の始まりだと言われている。その後、東国を訪れた景行天皇が上総国（現在の千葉）で雲取山・白岩山・妙法ケ岳の3山が美しく連なることから「三峯山」と名付け、三峯神社は「三峯宮」の称号を賜った。

(2)　神仏習合の歴史

文武天皇の時に修験の祖役である小角（オヅヌ）が修行を行ったことが始まりとなって修験道の場になったと言われている。天平17年（745）には国司の奏上によって月桂僧都（ゲッケイソウズ）が山主に任じられた。また淳和天皇の時には、勅命により弘法大師(空海)が十一面観音の像を刻み、三峯宮の脇に本堂を建て神社の本地堂とした。以降、僧侶による神前奉仕が明治維新まで続き、神仏分離以前は「三峯山高雲寺」と呼ばれていた。

(3)　三峯神社の衰退と復興

正平5年（1352）に足利氏の怒りを買い社領を奪われ山主も絶えてしまうが、月観道満により社殿の再建が行われ1533年には大権現の称号を賜るほどまで復興を遂げている。その後再び荒廃するが日光法印により再興する。

表1.　三峯神社の歴史

西暦	出来事
景行天皇41年	日本武尊が宮を造営（創建）
745年（天平17年）	月桂僧都が山主に任じられる
1352年（正平7年）	足利氏に社領を没収される
1533年（天文2年）	月観道満が社殿・堂宇の再建 大権現の称号を賜る
1720年（享保5年）	日光法印が山主になる
1883年（明治16年）	県社に列される

研究指導：伊藤洋子 教授　　Kenta　Oki

2.3　三峯講

古くから雲取山、白岩山、妙法ケ岳の3山は信仰対象となっていた。平安時代は山伏の修験道場として栄え、近世では火災・盗難除けとして信仰を集め、信者によって結成された「三峯講」は江戸を中心にして関東・甲信越・東海と広がっていった。

2.4　狼信仰

三峯神社の眷属（神様の霊力を受け、神様と同じ働きをするものとして仰がれる動物）は狼である。狼が日本武尊の道案内をしたことから三峯神社の使い神に定められたと伝えられている。

写真1　狼像

3.　三峯神社随身門について

表2.　随身門概略

建築名	三峯神社随身門（又は随神門）
建立年代	元禄4年（1691）/寛政4年（1792）再建
大工	林兵庫正信
基本構造	八脚門（三間一戸門）
屋根形式	切妻造　銅板葺
破風	軒唐破風

元禄4年（1691）建立。現在の随身門は寛政4年（1792）に再建されたものであり、昭和40年（1965）に改修されている。また、平成14年には月観道満山主入山500年記念事業として大規模な彩色復元が行われている。「三峯山」と書かれた扁額（ヘンガク）は増山雪舟の筆跡である。

埼玉県内でも有数の大規模な八脚門(※1)であり、かつて仁王門であった。仁王像は明治初年に鴻巣の勝願寺へ移された。当初は青銅鳥居（拝殿正面）付近に建立されていたという記録があり、表参道からこの門を通るのが当時の正参道であったと考えられる。

※1:八脚門…門の形式の一つ。親柱4本の前後に4本ずつの側柱が計8本付いていることが名前の由来。

写真2　三峯神社随身門

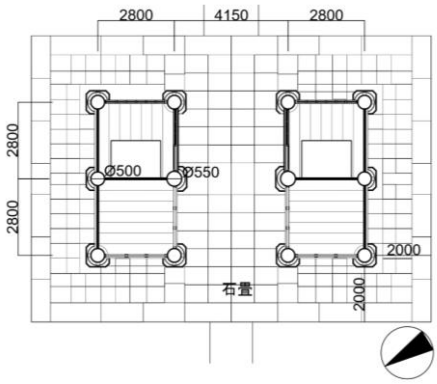

図2　随身門平面図

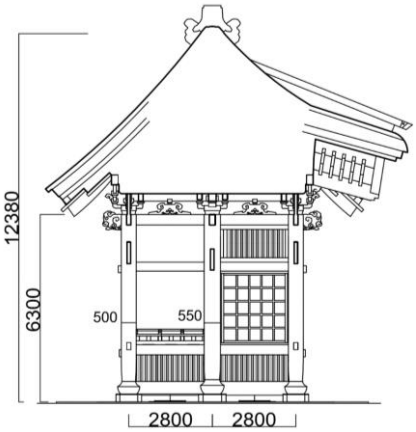

図3　随身門断面図

4.　研究史料と木割について

4.1　三峯神社随身門に関する史料

熊谷市の林氏が「木取帳」や「仁王門仕様寸法覚」の他、三峯神社随身門に関する史料をいくつか所有されているという情報を得たが、連絡をしたところ林金吾氏は亡くなられており、諸事情も重なり閲覧が可能になるのが2018年の3月以降になるとのことだった。その為、今回の研究ではこれらの史料を使わずに別のアプローチとして実測値と木割書との比較などを中心に行っていく。

写真3　林氏所有の史料

4.2　木割

木割とは、伝統的な木造建築を設計する際に用いられた大工技法の１つであり、建物の各部の寸法を基準寸法により割り出す方法である。その木割の技術を秘伝書として纏めあげたものが木割書であり、今回研究で使用した「匠明」もそのうちの一つである。

4.3　匠明

代表的な木割書であり、慶長 13年（1608）に成立。全5巻（殿屋集、門記集、堂記集、塔記集、社記集）から成る。

5. 随身門の再建と大工

5.1 随身門を建築した大工棟梁

先述した通り現在の随身門は寛政4年（1792）に再建されたものであるが、その再建を行った大工棟梁は妻沼（めぬま）の名工林兵庫正信(1736-1802)である。

林兵庫正信は、埼玉県内で初の国宝建造物として平成24年に指定された「歓喜院聖天堂」の建造を父親である林兵庫政清(1678-1753)と共に行った人物であり、安永8年（1779）には日光東照宮修理工事に従事したと言われている。他にも上野国押切村徳性寺観音堂の建築にも携わっている。

5.2 林兵庫について

三峯神社拝殿を棟梁として建設したのは林兵庫政清、随身門を建設したのはその息子の林兵庫正信であり、この「林兵庫」とは代々妻沼の地の宮大工棟梁として活躍した名家である。また、歓喜院聖天堂保存修理工事報告書によると政清の出自は、幕府作事方大棟梁を務めた平内応勝の二男が、林家 に婿入りした人物であることが伝えられており、この平内家は代表的な木割書である「匠明」を著したことでも知られている。

このように匠明と随身門の大工棟梁には家系における関係性があることが分かったため、実測値と匠明との比較を行っていく事とした。

6. 随身門と匠明の比較

（1）平面図

初めに平面図において比較する。「匠明」門記集の惣門では柱寸法が全て均一になっているが、三峯神社随身門は中央通りの太い柱２本とそれよりも少し細い柱10本、という形になっている。また、門記集の惣門には小さな注釈ではあるが「トビラ」という記載があった。しかし、現在の随身門には扉は存在せずこれも相違点であると言えるが、「仁王門注文手付金受取覚」には「戸ひら貳枚」という記述があり、建築当時は扉があったか若しくは当初は取り付ける予定だった可能性がある。

柱間枝数について比較してみると、どちらも正面は中の間18枝、脇の間が12枝であり妻の間の柱間枝数は12枝・12枝でありほぼ完全に一致していることが分かった。

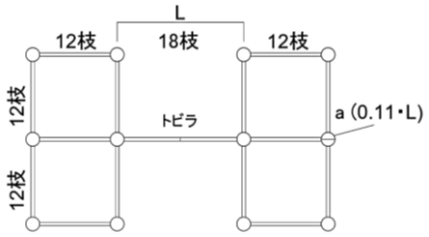

図4　門記集惣門平面図

（2）断面図

平面では構成がほぼ同じであったが、断面図で見ると違いが一目瞭然である。一目でわかる違いとして高さが挙げられる。匠明において中の間柱の外面から外面までの寸法（中の間の柱間寸法に柱一本分の厚さを加えたもの）を柱貫の上端までの高さとする設計手法をとっているが、その設計手法を三峯神社随身門に当てはめて考えてみても値が一致しない。しかし、匠明に記載された情報を元に作成した惣門の断面図を三峯神社随身門の断面図に重ね合わせてみると、匠明断面図が随身門断面図の腰貫下端から天井までと綺麗に一致しているように見て取れる。

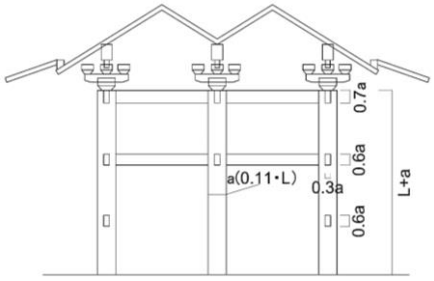

図5　門記集惣門断面図

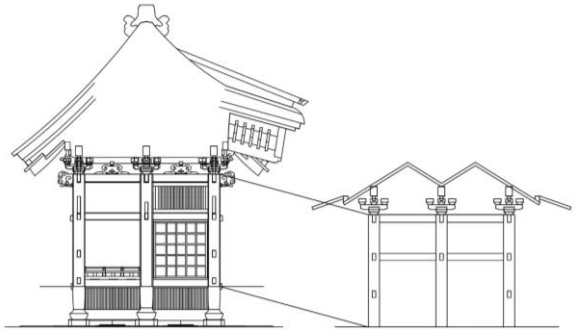

図6　断面図の重ね合わせ

（3）細長比

次に「匠明」門記集惣門の柱と三峯神社随身門の柱の細長比を比較する。

表3.　細長比比較表

細長比λ＝柱高さ　／　柱径

	柱高さ（mm）	柱径（mm）	細長比
「匠明」門記集惣門	4662	462	10.1
三峯神社随身門	5610	太:550　細:500	太:10.2　細:11.2

表2から、「匠明」門記集惣門における柱の細長比と三峯神社随身門の中央通りの太い柱2本の細長比はどちらも約10でありほぼ一致していることが分かる。ただし、随身門のその他の柱の細長比はそれらよりも値が少し大きい。

（4）妻飾

妻飾について、匠明では二重虹梁と板蟇股３具で構成されている。対して随身門では二重虹梁は同じだがその二重虹梁は出三ツ斗によって、棟は大瓶束（たいへいづか）によって支えられている。蟇股は匠明と同じく3具存在するが中備である。

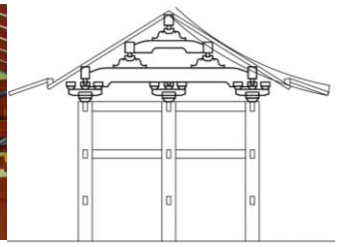

写真4　随身門妻部　　図7　門記集惣門妻飾

（5）軒唐破風と殿屋集「車寄せ」の比較

次に匠明殿屋集「車寄」と三峯神社随身門の軒唐破風の比較を、外形を大きく左右する項目に注目して行っていく。

まず唐破風正面について比較していく。第一に、反り高さについて匠明では桁の間の4分の１の寸法としている。対して随身門でも同じく約4分の1（4150mm/1060mm≒3.91）であるといえる。二つ目に茨鰭の位置について見てみると、桁の間を5分の1した中の両脇２つとなっている。随身門においても両脇の茨鰭が約5分の1の点（4150mm/855mm≒4.85）に位置しておりこちらも共通であるといえる。但し、形状は異なる可能性がある。

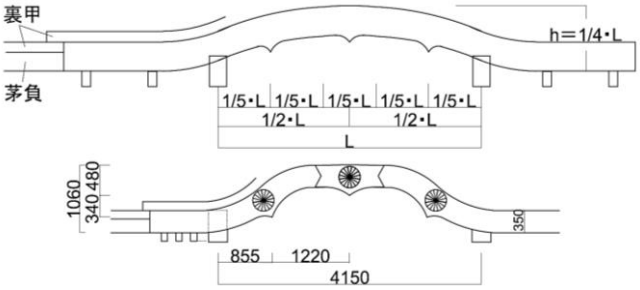

図8　唐破風正面（上:殿屋集より　下:随身門軒唐破風）

次に唐破風の断面について比較していく。匠明では虹梁と棟木の間に板蟇股があるが随身門では全面に龍の彫刻が見られ、これは江戸中期頃の華やかな装飾の流行りを反映したものだといえる。しかし、彫刻のみでは構造的にもつとは考えにくく、奥に何かしらの部材があると思われる。繰止めは柱外面から柱1本分、梁間が広い場合は1本半と記載されており、随身門は太柱の約1本半であったため梁間が広い場合に当てはまると言える。輪垂木は匠明では下端ざしだが随身門では上端ざしである。

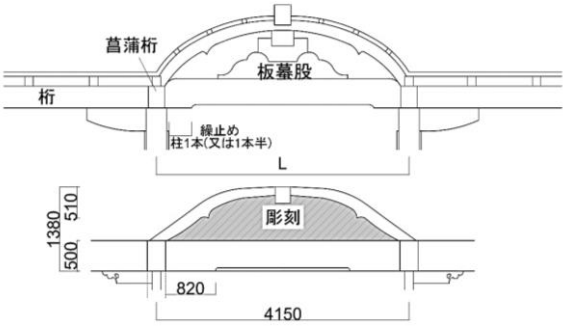

図9　車寄断面図（上:殿屋集より　下:随身門軒唐破風）

7.　比較結果

ここまでの匠明門記集惣門と三峯神社随身門の比較をまとめると以下のようになった。

共通点

①平面の柱間枝数がほぼ完全に同じである。
②匠明の柱と随身門の太柱の細長比がほぼ一致。
③匠明の断面図（屋根を除く）が、随身門断面図の腰貫下端から天井までと一致しているように見て取れる。
④どちらも妻飾に二重虹梁と蟇股が3具ある。
⑤唐破風の桁の間寸法と反り高さ及び茨鰭の位置の関係性が同じである。
⑥梁の繰止めの位置が一致。

相違点

①匠明の柱の太さは全て均一だが随身門は均一ではない。
②匠明では中の間柱の外面から外面までの寸法を天井までの高さとしているが、随身門ではそれらが一致しない。
③匠明が三棟作りなのに対して、随身門は鏡天井。
④匠明では妻飾が板蟇股３具と二重虹梁だが随身門では出三ツ斗と大瓶束（たいへいづか）と中備の蟇股３具。
⑤随身門では軒唐破風の奥に板蟇股では無く彫刻が施されている。
⑥輪垂木が匠明では下端ざしだが随身門では上端ざし。

以上のように共通点がとても多く匠明を元に設計している可能性が高いといえる。匠明を基準に設計したと考えると、共通点③からは、匠明門記集の惣門を腰高にしたものにしようとしたのではないかと推測することができる。また、この腰高にしたことが相違点②で述べた中央通りの2本が太い理由だとも考えられる。

8.　考察・まとめ

林兵庫が「匠明」を著した平内家の流れを汲んでいるということや、柱間枝数の一致を主とした共通点の多さなどから、林兵庫正信が随身門の設計において匠明を基準としているのはほぼ間違いないだろう、というのが自身の見解である。匠明を基本として腰高にし、それに華やかな彫刻により飾り付けるなど時代の流行りを取り入れたのがこの随身門であると考えられる。このように、三峯神社随身門は「林兵庫」という宮大工棟梁の名家がどのように建物を作り上げていたかを知ることが出来る、現存する史料の１つであると言えるのではないだろうか。

参考文献

1）三峯神社HP　http://www.mitsuminejinja.or.jp/index.htm
2）秩父市HP　http://www.city.chichibu.lg.jp/3986.html
4）熊谷デジタルミュージアム　http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm
6)埼玉県教育委員会「埼玉県近代社寺建築緊急報告書」昭和59年
7)田口幸樹「埼玉県北部の神社遺構から見る寺社建築の設計手法」
8)横山晴夫「三峯神社史料集」　第1巻、第7巻